

# 名古屋 文化 情報

2013

3

Mar.

No.348

NAGOYA  
Cultural  
Information



2013  
3  
Mar.

## Contents

- 三月のうた ..... 2  
随想 清水 陽子 現代芸術家 ..... 3  
視点 「夢ぼけっと」の11年 まとめ/酒井晶代 ..... 4  
この人と... 神野 公男さん(下) 聞き手/田中由起子 ..... 6  
ピックアップ ..... 8  
おしらせ ..... 9



### 表紙

作品

#### 「起源の詩」

(2012年/200×1680cm/岩絵具・箔・膠・麻紙・パネル)

自身の原風景、原体験を基にした作品です。生命の源流を探究し、その壮大な力を受け止め、自身の中に眠っている「生命の根源」としての記憶を見つめた作品です。

会場 コバヤシ画廊

濱田 樹里 (はまだ じゅり)

1973年 インドネシア生まれ

1999年 愛知県立芸術大学大学院美術研究科修了

2010年 名古屋市芸術奨励賞新人賞

2012年 第5回東山魁夷記念日経日本画大賞展大賞

2012年 名古屋市文化振興事業団第28回芸術創造賞

現在 名古屋造形大学日本画コース専任講師

三  
月  
の  
う  
た

## 初蝶

白石喜久子  
しらじし きくこ

如月の浜に火種の残りゐて

薔薇の木に紫さして風花す

青空に風鳴つてをり雛祭

鳥の巣の下は大きな水の渦

初蝶や赤ん坊にもパスポート

私の周りに長命の方が沢山いらっしやる。特に俳句に関わって居られる方はとても活力に満ちて行動的。俳句は「めでたきもの」といわれるが、生きていくことの喜びが伝わって来る一句に出会いたい。好きな俳人に阿波野青畝がいる。彼の素直で大らかな作風に魅かれる。九十歳近くの作品に

初蝶来天の広さを測らんと

のびやかな発想と生き物への愛に溢れている。憧れの境地へ近づくために努めてゆきたい。

(田座「農」同人)

## 随想

## 科学と芸術 — 対極か両極か



清水 陽子 (現代芸術家)

「理系なのにどうして芸術の世界に入ったんですか?」—展覧会の会場で必ず聞かれる質問です。会場には生きた細胞を利用した作品や、成長を続ける有機結晶が並び、これらの作品はアトリエと生物化学の実験室の両方で作られています。

子どもの頃から芸術が好きで、絵を習っていましたが、生き物やその美しさに惹かれて大学では生物化学を専攻していました。その影響で生命のみずみずしい美しさや、自然の生きた数理性と芸術性が、主な制作テーマになっています。芸術と科学の2つの分野を融合した時、人間の力を超越した果てしない美しさや新しい表現が見つかるのではないかと考えています。

対極にあるように思われがちな科学と芸術ですが、実は非常に密接な係わりがあり、またとても似通った分野でもあります。最大の共通点は非常にクリエイティブな分野だということです。常に新しい切り口で、まだ誰も見た事のない未知の世界を探求します。

ニュートンが「落ちたりんごは地球に引っ張られているのではないか?」と万有引力を発見した時、ピカソが「いろいろな角度から見た物の形を一つの画面に表現できるのではないか?」とキュビズムを発表した時、「そんな突拍子もない事!」と当時の誰もが思ったことでしょう。その発想は人々の考えを大きく変え、今では新たな常識となりました。既成概念にとらわれない柔軟なひらめ

きとインスピレーションで、世の中の批判を恐れず日々実験を繰り返し何かを追求する、科学者と芸術家という生き方も似ているような気がします。

また科学の知識を深めることで、芸術を新たな次元へ導くこともできます。科学者で芸術家でもあったレオナルド・ダ・ヴィンチが解剖学を追求する事で誰よりも正確に肉体を描写したことはあまりにも有名です。また現生のアーティストでは、アメリカの現代芸術家マシュー・パーニーなども医学出身の作家で、幻想的でありながら、極めて生々しくリアルな描写は医学者でなければ表現できない世界です。

日本の芸術家が世界で勝負するためには、欧米の模倣ではなく日本ならではの強みを生かす必要があります。今の日本が世界に誇るもの、それは自動車産業やエレクトロニクスでもわかるように、最先端の科学技術とテクノロジーです。そういう意味でも日本人の芸術家が科学を融合するのは自然なことではないでしょうか。しかも生物学のような生きた科学を追及するアーティストがいてもいいのではないかと考えています。芸術によって新たな科学の発見を、科学によって新たな芸術の発見を。

これからも芸術と科学を融合した新しい分野を開拓すべくがんばっていきたいと思います。

<http://www.yokoshimizu.com>

## 「夢ぽけっと」の11年

水内喜久雄さんの私設図書館「夢ぽけっと」(名東区本郷)が3月で閉館すると知ったのは昨秋のことだった。詩集専門の図書館として貴重な存在であっただけでなく、イベントの運営、書物の企画・編集、詩作を学ぶ人々の勉強会など、2002年の開館以来、詩に関するさまざまな情報・活動の拠点となってきた「夢ぽけっと」。主宰者である水内さんに11年間のあゆみを伺った。(まとめ:酒井晶代)

## 「夢ぽけっと」誕生まで

実は「夢ぽけっと」誕生までには長い前史がある。学生時代の水内さんにとって、詩は何よりも「難解なもの」。しかし、大学卒業後に就いた小学校教諭とい



水内喜久雄さん

う仕事のなかで、詩への考え方が大きく変化したという。

ひとつは、詩の言葉が人を力づけることの発見。一編の詩が子どもたちを生き生きとさせる様子を目の当たりにし、教室で幾度も「詩に助けられる」経験をしながら魅力に気づいていった。教科書だけではつまらない、子どもたちともしっかりとたくさん詩を読みたいとの思いから詩集を集めはじめ、現職時代にすでに2000冊ほどが手元にあったという。

もうひとつは詩人のまど・みちおさんとの出会い。まどさんの詩「つけものの おもしろ」の教材研究に行き詰まり、作者本人を訪問したのは教師になって4年目の1978年秋のこと。作者に会えば何か突破口が開かれるのでは…とやむにやまれぬ思いで自宅に赴いたものの、何を尋ねたらよいか分からずオロオロする水内さんに、まどさんは「物の見方」について話してくれた。コップは水を入れて飲むとはじめてコップになる。そうでないときには、例えばフタにも花瓶にもなるでしょう…というように。「普通の言葉で普通のことが書いてあるのに奥深い」まどさんの詩の世界に驚き、日常の再発見に「うわ、すげえな」と感激した。詩に対するイメージが一変した出会いだったそうだ。

こうした経験が出版の形で最初に実を結んだのが『子どもといっしょに読みたい詩』(小林信次氏との共編/あゆみ出版、1992年)である。学校生活や学年に配慮しつつ100編近い詩を主題別に構成したこのアンソロジーは、教

育書としては異例の売れ行きとなった。これが契機となり、「詩を読もう!」(谷川俊太郎、新川和江、阪田寛夫など12名の個人詩集のシリーズ/大日本図書、1999~2000年)のような児童書編集の分野にも水内さんの活躍の場は広がっていく。

## 作り手と読み手をつないで

突発性難聴をきっかけに27年間勤めた教職を辞した水内さんは、2002年4月に「ポエム・ライブラリー 夢ぽけっと」を開く。集まった多数の詩集を前に、「自宅に置いて埋もれさせておくのはもったいない。大勢の人に使ってもらおう」と考えたことが開館のきっかけだったそうだ。「夢ぽけっと」という魅力的な名前は「ポエム・ライブラリー」を含む全体的な音の響きから付けたもの。まどさんの詩「ふしぎなポケット」や人気漫画『ドラえもん』の四次元ポケットのイメージも重ねあわされているという。数千冊の詩集を無料で貸し出す施設は全国的にも珍しく、開館以来とりたてて宣伝等はしなかったそうだが、教員や親子をはじめ、詩人や詩の創作を学んでいる人、朗読を教えているなど、利用者は全国におよぶ。

一方で8畳ほどのこの空間は水内さんの仕事場や詩作を志す人びとの勉強会の場としても機能してきた。また詩人やシンガーソングライターを招いての朗読会やライブの開催、自作朗読や詩集の交換・販売といった詩を愛好する人たちの交流会「ポエム・フェスティバル」の運営など、「夢



水内さんは絵本や創作児童文学の作家でもある

ぽけっと」ではイベントの主催も熱心に行なってきた。私設図書館を標榜しながらも、本の貸し出しをはるかに超えて、詩の作り手と読み手をつ

なくさまざまな普及活動の拠点となってきたことがわかる。おそらく、こうした仕事が多忙になったことも一因だろう。2011年6月以降はポエム・ライブラリーとしての活動を停止、編集や企画の仕事に軸足を移して、蔵書を部分的に整理したりもしている。「いずれ広い場所へ移動してカフェ兼図書館をつくりたかったのですが、果たせませんでした」と水内さんは話す。

## 詩集が生まれる場所



ずらりと並んだ詩集

「夢ぼけっと」の数多い成果のなかでも、とりわけ出版に関する仕事は意義深い。先述の「詩を読むもう!」は、児童書分野では画期的な書き下ろしの個人詩集

シリーズだった。水内さんはその後も児童書や教育書の分野で多数のアンソロジーを編集しているほか、『一編の詩があなたを強く抱きしめる時がある』（PHP研究所、2007年）をはじめとする一般書、より広範な読者を意識した詩集の編集にも携わっている。さらに近年では出版社の協力を得てワンコイン500円で買える詩集「夢ぼけっと500詩文庫」を企画・編集し、新人たちの出版も応援してきた。編集という仕事の難しさと面白さをめぐり、水内さんの言葉を紹介したい。

——「編集には編者の人となりが見えます。個人詩集の場合、選んだ詩だけでその詩人を表現しきれているか、という自らの選択眼への不安が絶えずつきまといます」「一方で醍醐味もたくさんあります。たとえば詩の構成を通して、詩人の『この側面』を伝えたいという自らの読みを表現できること。また、作者本人の反応をたのしむハラハラ感も魅力です。個人詩集には“編者から詩人への挑戦”という側面があると感じます」

——「多数の詩人の作品を集めたアンソロジーは、毎回、必ずテーマを決めて編集します。テーマ設定の出発点は読み手です。読者がいまの時代に何を期待するかを考えながらテーマを練ります。自ら考案したテーマで編集することで、出来上がった本は詩人の本であると同時に『自分自身の本』にもなります」「半面、全体構成を整えるなかで、入れたい



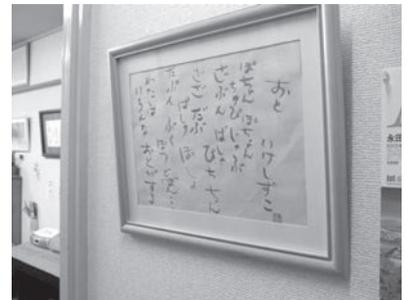
壁には詩人の直筆原稿がたくさん

詩を収録する場所がどうしても探し出せない時もあり、個々の作品の魅力とアンソロジーとしての魅力を両立させることは難しい。楽しくも悩み多き作業です」

「依頼を受けて編集の仕事をしてきたけれど、僕は編集『者』ではありません」という言葉が、お仕事に対する姿勢をよく表していると感じた。谷川俊太郎さんや大岡信さんから、ビートたけしさんや黒木瞳さんまで、水内さんが編むアンソロジーはその間口の広さが大きな魅力。現代詩の詩人とシンガーソングライターの歌詞が一冊のなかに違和感なくならぶ様子は、私たちの詩に対する見方や考え方を広げてくれる。

## 夢はつづく

詩の世界に新しい風を吹き込んだ水内さん。3月の「夢ぼけっと」閉館は惜しまれるが、ご本人としては「最上の顔ぶれで詩集を作ってきた、その意味で作りきったという感があり



工藤直子さんの詩も飾られている

ます」とのこと。工藤直子さんの詩「おと」（詩集『のはらうたI』に「いけしずこ」の名義で掲載）の一節「わたしは／いろんな おとがする」に託して、「自分のなかにまだまだ『いろんな おと』＝可能性があるのではないか。これまでにしてこなかったことの中から、次に熱中できるものを探したいのです」「小説や脚本の執筆など、取り組んでみたいことはたくさんあります。僕たちがそうした夢を追いつけることが、若い人たちに夢をつなぐことにもなると考えています」と現在の心境を語ってくださった。

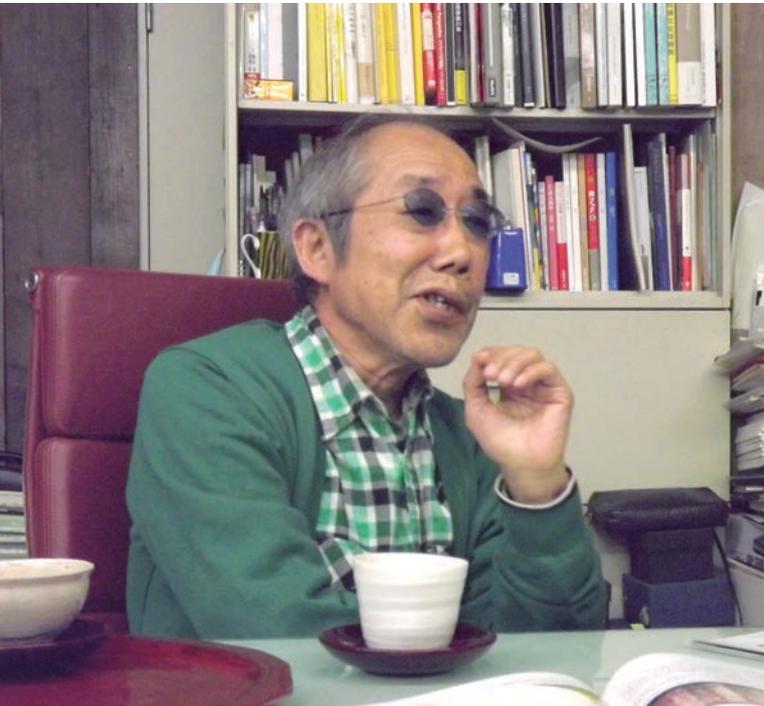
「ほかの編集者や出版社が作った詩集があるならもう必要がない。すでにある内容の詩集なら私が編集する必要もない、いつも思っています。それが編集者としてのこだわりやプライドでもあり、新しい企画を考える時に、この詩集がほんとうに必要かどうかということをよく考えます」（『ステキな詩に会いたくて—54人の詩人をたずねて—』小学館、2010年）との思いで仕事に取り組んできた水内さんは、新しい自分に会うために、これまでとは異なる場所での再出発を決意されたのだろう。「夢ぼけっと」は閉館するが、詩の普及活動に専念された年月を糧として、「夢ぼけっと」の精神と水内さんの夢はこれからも続いていく。

### インフォメーション

「夢ぼけっと」名古屋市中東区本郷3-5 グロウバルビル4C  
電話（FAX）：052-769-5810

水内喜久雄公式サイト  
<http://www.takakoclub.jp/yumepocket/>

## この人と...



Gallery HAM代表・ディレクター

じんのきみお

## 神野 公男さん ①

## 「見たことがない絵が見たい」が原動力に

フランス滞在中にフランシス・ベーコンの絵画を見たことがきっかけで、現代美術に引き込まれたという神野公男さんは、帰国後の1970年代末から、名古屋の現代美術シーンのさきがけとなる画廊の一つである、ギャラリーたかぎのスタッフとして勤務しはじめた。今回は、神野さんが名古屋の現代美術にどのようにかかわってきたかを中心に、独立後、そして現在にいたるまでのお話をお聞きした。

(聞き手:田中由紀子)

## 名古屋の現代美術の創生期にかかわる

ギャラリーたかぎは「ギャラリーポザール」として1973年に開廊したギャラリーで、神野さんが勤務することになった1970年代末に「ギャラリーたかぎ」に改称して以来、桜画廊やアキライケダギャラリー、コオジオグラギャラリーなどと共に、名古屋を代表する現代美術画廊として全国的に知られる存在となった。

「80年代後半から90年代初めに全盛を誇った名古屋の現代美術を支えるギャラリーが、だんだんと出そろってきた時期でした。当時は外国人の現代作家の展覧会を、名古屋と海外で同時期にやっており、ドクメンタなど国際美術展や海外のアートフェアに出向くことも多くありました。名古屋の画廊が、世界と共通の価値基準を持っていたんです。



ギャラリーたかぎに勤めていた40代のころ

そのころ、東京にはアンディ・ウォーホルやジャスパー・ジョーンズなど海外の作家を取り扱う画廊はあっても、彼らの展覧会を行っていた画廊はほとんどありませんでした」。

## ギャラリーたかぎとICA, Nagoya

ギャラリーたかぎのオーナーでディレクターを務めていた高木啓太郎さんは、もともと繊維会社を経営しており、名古屋市北区にあったその工場が移転した後に空いた敷地と建物の一部を活用して、1986年にICA, Nagoyaというアートセンターを立ち上げた人物。

「僕はICAの運営には直接かかわってはいませんでした。ICAが設立される前の1984年には、N1ギャラリーという展示スペースと写真撮影用のスタジオが工場跡に整備されました。N1ギャラリーではギャラリーたかぎと同時開催で



イギリス具象絵画を代表する作家、アンソニー・グリーン（右）と

荒川修作のドローイング展が開催され、スタジオは画家の辰野登恵子が1年くらいアトリエにして、大きな作品を制作していました。あとはギャラリーたかぎの取り扱い作家の作品を常設展示したりと、倉庫兼用のサテライト的な展示スペースとして使っていました。工場を活用したこのギャラリーは天井高が4メートルもあり、当時は国内最大級の展示スペースだったんです」。

1986年の春、N1ギャラリーがロサンゼルス在住の現代アートコレクター、フレデリック・R.ワイズマンのコレクション展の巡回会場となったことが契機となり、ワイズマン展の運営にかかわっていた南條史生さん（現・森美術館館長）をディレクターに迎えてICA, Nagoyaが設立された。

「国際交流基金に勤めていた南條くんとは、作品の貸出や国際展の運営などがかかわり、それが縁で高木さんに紹介しました。高木さんも南條くんと知り合って、欧米のようなアートセンターがつくれると確信したんじゃないかな。ギャラリーたかぎが持っていたアルテ・ポーベラの作家の作品を、『これ買えるんだよ』と南條くんに見せたのも僕なんです」。

ICA, Nagoyaでは、イタリアのアルテ・ポーベラの作家であるヤニス・クネリスやマリオ・メルツの日本初個展が開催され、展示空間に合わせた滞在制作も行われた。6年間でICA, Nagoyaの活動は終了したが、公立の美術館でも販売を目的とする画廊でもない私立のアートセンターで、欧米の作家を招聘した大規模な企画展が行われたのは、極めて画期的なことだった。



左二人目から黒田アキさん、神野さん、田中敦子さん、次女真理さん、金山明さん

## 独立してGallery HAMを開設

ギャラリーたかぎで3、4年勤務した後、退職。その後また戻って数年働き、1992年に独立して名古屋市東区にGallery HAMを開設した。画廊といえばホワイトキューブと呼ばれる白い壁が定番だが、移転して現在は千種区にあるギャラリーは、足場板が張られた壁が特徴だ。

「独立は成り行きですね。どういう方針でやっていこうとか、そういうことをあまり考えるタイプじゃないから。僕は絵を買うのが好きですが、画廊をやっていると、取扱作家の作品を買った方がいいんじゃないかと考えて、買えなくなっちゃうんです。ぱっと見て、直感でいいなと思う作品を



足場板張りの壁が特徴のGallery HAMの展示風景

買うのがいいですね」。

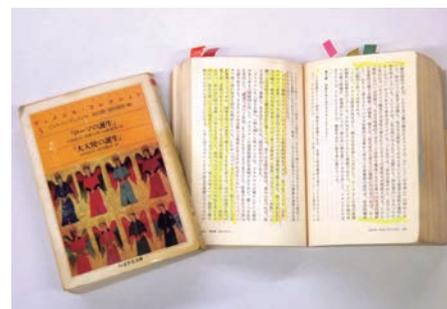
取り扱う作家を決めるのも、展示も企画も神野さんが行っている。

「選ぶ基準は、僕自身の見たことがないものを見たいという要求を満たしてくれる作家や作品ですね。この歳になっても興味や好奇心を広げてくれる、そういう作家や作品に惹かれます」。

## 翻訳者としての顔

今回のインタビューで神野さんの知識や興味の幅広さにあらためて驚かされた筆者だが、神野さんが翻訳にかかわった本が出版されていることを初めて知った。

「元・愛知大学教授で批評家の丸山静さんとたまたま知り合い、フランス語を教えてやるからと誘われて、丸山さんのところに週に1回通って、フランスの比較神話学者、ジョルジュ・デュメジルの著書10冊を原文で講読しました。その時、何人かで分担して翻訳したものが5冊にまとめられて出版されたんです。僕は『ローマの誕生』をおもに担当しました。でも発行部数が少なかったのもう古書店でしか手に入らないんです」。



神野さんが翻訳にかかわった『デュメジル・コレクション3』（ちくま学芸文庫）

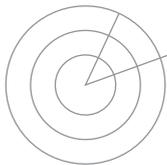
## 神野さんが見た名古屋という場所

最後に、名古屋の現代美術の全盛期をよく知る神野さんから見た、現在の名古屋の現代美術シーンについてお聞きした。

「いまは世界のどこにも中心というか、求心力がない時代です。だから昔のように、海外に行ってさまざまな作家や作品を見たいとあまり思わなくなりました。一人の作家をじっくり見ている方がいいと思います。東京は情報が多く、速度が速くて忙しいけれど、名古屋はそういう影響が少ない分、作家とじっくり向き合い、つき合っていくことができる環境だと思います」。

(了)

# ピックアップ



異色の2企画が開催！

## ファン・デ・ナゴヤ美術展2013

1月9～20日、名古屋市東区の名古屋市民ギャラリー一矢田でファン・デ・ナゴヤ美術展2013が開催された。

ファン・デ・ナゴヤ美術展は、1998年に始められた展覧会で、展覧会のアイデアを募集し、採択された企画が開催されている。今回、応募件数16件の中から選ばれたのは、「であ、しゅとうるむ」（企画：筒井宏樹さん）と、「のこりもの 世界の性質：残るということについての研究」（企画：山崎剛さん）の2企画だ。

第1展示室で行われた「であ、しゅとうるむ」は、「嵐」を意味するドイツ語「der sturm」から展覧会名がつけられたという。「der sturm」というと、1910年にベルリンで創刊され、ドイツ表現主義が紹介された美術雑誌が『DER STURM』である。そして、この雑誌が前衛美術運動を推進したことに倣い、今展の参加作家を含む若手作家たちが、自ら制作したマンガや小説、評論からアートへのアプローチを図ろうとする小冊子もまた『であ、しゅとうるむ』であるという。このことから、今展がマンガやイラストなどのサブカルチャーとアートを同じ空間に展示することにより、現代の日本の表現の多様性を見せようとする意図がうかがえた。会場には、11組の作家による絵画や立体、映像、写真、インスタレーション、同人誌、Webイラストが並び、廊下や控室まで作品で埋め尽くされた。作品が日々増殖

し、別の作家の作品や異なるジャンルの作品が折衝し介入し合うさまは、ほかの展覧会にはないおもしろさだった。

一方「のこりもの」は、アートをなにかを知ろうとする行為＝研究と位置付けて、ただ残っているという当たり前の事実からあらためて世界を捉えようとする「研究としての美術展」。南山大学人類学研究所の研究プロジェクト『「作ること」と「知ること」：せかいをつかまえる新しい方法』に基づいて、学者と作家が「研究者」という立場で参加し、第2～7展示室はそれぞれが人類学、媒体学、感覚探寸学、認識外認識学、現前学の研究室となった。映像やアニメーション、パフォーマンス、写真やサウンドを使ったインスタレーションなどが並んだが、作品というより世界を捉える営みとしてそれらが提示されていたことから、私自身、アートが本来はそういう目的から生まれたということに立ち返ることができた。

どちらもアートをサブカルチャーや学問とクロスオーバーさせる試みで、これまでになかった個性的なアプローチが興味深かった。ユニークな企画が実現できるファン・デ・ナゴヤ美術展に、多くの若手企画者や作家に興味を持ってもらいたい。（T）



「であ、しゅとうるむ」展示風景



「であ、しゅとうるむ」  
ライブペインティング風景



「のこりもの」  
媒体学研究室 展示風景



「のこりもの」  
現前学研究室 展示風景

# プロに学ぶ演劇講座 受講生募集

地元で活動する演出者と一緒に、演じることの楽しさを体感しませんか？

2008年にスタートした「プロに学ぶ演劇講座」。6年目の今年は文化小劇場11館で開講します。基礎から実践まで、様々なジャンルの講座があるので、きっと興味のある内容が見つかるはず。現在、受講生を募集していますので、演劇初心者の方も演劇経験のある方も、ぜひご参加ください。

## 南文化小劇場

TEL 052-823-6511



「せりふを入れよう」  
対話の練習

日 時

4月3、10、17、24日  
5月1、8、15、22、29日  
6月5、12日  
6月12日は発表会

岩川 均  
(劇座)

14:00~16:00

回数 11回 料金 7,000円

## 名東文化小劇場

TEL 052-726-0008



「朗読劇で樋口一葉さん  
に会いに行きませんか」

日 時

4月10、17、24日  
5月1、8、15、22、29日  
6月5、12、19、26日  
6月26日は発表会

星野 龍美  
(日本俳優連合会員)

14:00~16:30

回数 12回 料金 8,000円

## 守山文化小劇場

TEL 052-796-1821



守山演劇ラボ'13  
「劇・空間」

日 時

4月10、17、24日  
5月8、15、29日  
6月5、12、19、26日  
7月3日  
7月3日は発表会

神谷 尚吾  
(劇団B級遊撃隊)

18:30~21:00

回数 11回 料金 7,000円

## 西文化小劇場

TEL 052-523-0080



初級・歌劇考房  
~歌ってみよう! 演じてみよう!~

日 時

4月11、18、25日  
5月2、9、23、30日  
6月13、20、27日  
7月11、18、26、30日  
7月30日は発表会

右来 左往  
(劇作家・演出家)

18:30~21:00

回数 14回 料金 7,000円

## 天白文化小劇場

TEL 052-806-8060



身体と心を動かして  
楽しむ演劇講座

日 時

4月17、24日  
5月8、15、22、29日  
6月5、12、19、26日  
7月3、10日

川村 ミチル  
(演出家・俳優  
劇団そらのゆめ代表)

19:00~21:00

回数 12回 料金 6,000円

## 緑文化小劇場

TEL 052-879-6006



プロに学ぶ演劇講座  
みどり演劇塾'13

日 時

4月18、25日  
5月9、16、23、31日  
6月6、13、19、26日  
7月4、9日  
7月9日は発表会

本島 勲  
(演劇創造αの会)

13:30~15:30

回数 12回 料金 6,300円

## 千種文化小劇場

TEL 052-745-6235



「演技初級講座」

日 時

5月1、8、15、22、29日  
6月5、12、26日  
7月10、17、24日

岡田 一彦  
(劇座)

9:30~11:30

回数 11回 料金 7,000円

## 中村文化小劇場

TEL 052-411-4565



コントで弾ける

日 時

5月14、21、28日  
6月4、11、18、25日  
7月2、9、17、24、30日  
7月30日は発表会

なか としお  
(演出家・劇作家)

13:30~16:00  
\*7月30日のみ 10:00~17:30

回数 12回 料金 8,000円

## 中川文化小劇場

TEL 052-369-1845



好評の「日本の怪談」  
第3弾!

日 時

5月15、22、29日  
6月5、12、19、26日  
7月3、10、31日  
8月7、8日  
8月8日は発表会

石狩 真佐夫  
(舞台創造なのの会)

13:30~16:00

回数 12回 料金 9,000円

## 港文化小劇場

TEL 052-654-8214



シアターゲームをしながら  
演劇の基礎を学ぶ2

日 時

9月6、13、18、27日  
10月3、11、18、24日  
11月1、8、21、29日  
12月6、12、20日  
12月20日は発表会

丸川 亜矢  
(演出家)

18:30~20:30

回数 15回 料金 7,500円

## 北文化小劇場

TEL 052-910-3366



10日間で短編劇を作る!

日 時

9月18、25日  
10月2、9、16、23、30日  
11月6、20、27日  
11月27日は発表会

平塚 直隆  
(オイスターズ)

19:00~21:00

回数 10回 料金 8,000円

☆お問合せ、お申込は各文化小劇場へお願いします。

☆受講料は初回に前納していただきます。

☆途中で辞められた場合でも納入された受講料の払い戻しはできませんのでご了承ください。

☆途中参加の場合でも受講料は全額お支払いいただきます。

☆受講料はテキスト代込みですが、講座によっては別途ご用意いただくものがあります。

# 平成24年度 名古屋市芸術賞

平成24年度名古屋市芸術賞は、次の方が受賞されました。「芸術特賞」は、長年にわたり優れた芸術創造活動を行い、かつ、近年における活動が顕著で、名古屋の芸術文化の振興に大きな功績のあった方に、「芸術奨励賞」は、継続的に活発な芸術創造活動を行い、かつ、将来の活躍が期待され、今後とも名古屋市の芸術文化の振興に寄与することを期待できる方に贈るものです。

## 名古屋市芸術特賞

さとうともひこ

### 佐藤 友彦

伝統芸能（狂言）



幼少時より故佐藤秀雄、三世井上菊次郎に師事する。昭和25(1950)年、7歳にて「土蜘蛛」の間狂言・小アド役で初舞台を務め、昭和39(1964)年、大学在学中に能楽協会に入会し、プロとしての活動を開始した。

昭和42(1967)年、「三番叟」を抜き、昭和46(1971)年より名演会館を会場とした「名古屋狂言小劇場」を主宰し、ホール狂言の先駆けとなった。

昭和52(1977)年、これまでの舞台活動の功績が認められ、名古屋市芸術奨励賞を受賞したほか、昭和61(1986)年には重要無形文化財総合指定保持者の認定を受け、同年、日本能楽会に入会した。

平成2(1990)年、「花子」を抜き、同年、狂言画の第1回個展を開催。また、平成4(1992)年より井上祐一(四世井上菊次郎)とともに「狂言・鳳の会」を結成し、平成21(2009)年までの18年間で53回の定期公演を開催した。新作狂言なども手がけ、「お用の尼」は平成10(1998)年に国立能楽堂の企画公演・芸術祭主催公演としても上演された。

現在も、能狂言の舞台活動にとどまらず、オペラや朗読劇の演出、狂言史や狂言台本の研究など幅広い活動を続けているほか、大学等の講師を務め、狂言の普及、後継者の育成活動を活発に展開している。

### 舞台VTR映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。



ビデオソフトの企画・制作

有限会社 エーワン・ビデオ・システム  
TEL (052)896-2256 FAX (052)896-4100



ハードシステム 部門  
AV機器販売部門 (家庭用)  
映像企画・制作部門  
放送関連部門  
機器設備レンタル部門

映像メディアの未来を創る  
生きた情報を発信

TVS 株式会社 東海ビデオシステム  
名古屋市中区上筒井二丁目14-15 TEL.<052>322-6541(代表) 6562(芸能部)



■ホール舞台音響設備 販売、設計、施工、保守

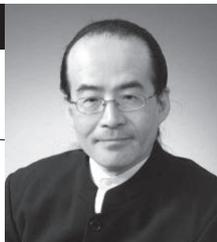
AV 株式会社 エーアンドブイ  
〒464-0846  
名古屋千種区城木町二丁目98  
TEL 052 (761) 5400  
FAX 052 (761) 0909

## 名古屋市芸術奨励賞

やました まさる

## 山下 勝

音楽（ピアノ）



昭和56(1981)年より2年間、ミュンヘン国立音楽大学へ留学し、帰国後、リサイタルなどのソロ活動を中心に演奏活動を行いながら、高校や大学での講師を務める。昭和60(1985)年、米国ユタ州スノーバード音楽祭に参加し、リサイタルのほか、公開レッスンやコンクールの審査を行った。また、同年、名古屋二期会における歌劇「ヘンゼルとグレーテル」でのピアノ伴奏など、声楽の伴奏者として活動を始め、以後毎年、同会の演奏会に出演している。

器楽とのアンサンブルも活発に行っており、平成12(2000)年には、「ピアノ・トリオ・エウロス」を結成。平成17(2005)年、「トリオ・シュパンツィヒ」に改名し、ベートーヴェンのピアノ三重奏曲全曲演奏や、シューベルト、メンデルスゾーン、シューマン、ブラームスなどのドイツロマン派全曲演奏をはじめ、数多くの演奏会を企画、出演している。これらの功績が認められ、平成19(2007)年には名古屋音楽ペンクラブ賞を受賞した。

リサイタルや演奏会の出演は年間約50本を数え、多くの声楽家、演奏家との共演や、演劇、バレエ、日本舞踊とのコラボレーションなど幅広い分野で活動するほか、大学等の講師や各種コンクールの審査、学校等での公演を通じてクラシック音楽の普及に力を入れており、今後も更なる活躍が期待される。

## 名古屋市芸術奨励賞

くらち かえ

## 倉知 可英

舞踊（現代舞踊）



幼少時よりモダンダンスを故奥田敏子に学び、故石井みどり、折田克子、倉知外子に師事する。

平成10(1998)年、現代舞踊協会第2回アンデパンダン新人舞踊展においてアンデパンダンエクセレント賞を受賞。同年、愛知県新進芸術家海外留学等補助事業の助成を受け、フランスのグルノーブル国立振付センターでの2年間の研修を経て、グループ・エミール・デュボアに在籍し、フランス国内や約20カ国のツアーに参加した。

平成18(2006)年の帰国後、名古屋を拠点に国内での舞踊活動を再開し、平成21(2009)年、名古屋市民芸術祭2009主催事業「戦国だんす絵巻」、平成22(2010)年、名古屋開府400年記念ステージ(記念式典)の振付(一部)を担当したほか、同年、あいちトリエンナーレ2010祝祭ウィーク共催事業において「光の記憶」を発表した。

平成24(2012)年には、名古屋市文化振興事業団平成23年度地元名古屋の優秀舞台公演「花より華らしく…芸術に生きた女・女・女」において「Ma Sada Yacco-凜として咲くが如く-」を発表するなど、当地域での活動はめざましく、ダンス指導の傍ら、自らダンサー・振付家として様々なジャンルのアーティストとのコラボレーションに意欲的に取り組んでおり、今後も更なる活躍が期待される。

## 名古屋市芸術奨励賞

ぶん がく かい

## じゅん文学の会

文芸（小説・エッセイ）



じゅん文学の会は、平成6(1994)年、戸田鎮子氏が主宰となって設立され、同年、文芸同人誌「じゅん文学」を創刊。『じゅん文学は「純文学」ではない。純、準、順、潤、殉、醇、遵、馴、循、など、自由に楽しみたい。』という会則のもと、毎年4号の頻度で発行し、現在までに74号を発行した。

会員数は、創設当時の26名から現在では46名となり、会員の高齢化が進む団体が多い中で、じゅん文学の会は30歳代から80歳代までの幅広い年代層で構成されている。年8回開催の例会において、会員相互で作品に対する批評を活発に行い、文章力の向上に励んでいるほか、4号ごとに行っている「じゅん文学賞」の選考、決定により、会員同士が切磋琢磨し、会全体のレベルアップに努めている。

「じゅん文学」が扱う作品は、小説のほか、評論、エッセイ、詩、短歌、俳句など自由であり、そのうち、「熊野父」が平成15(2003)年の第16回中部ペンクラブ文学賞を、「ここに住まう」が平成16(2004)年の第17回中部ペンクラブ文学賞をそれぞれ受賞したほか、最近では平成24(2012)年に「見返り仏」が全国同人雑誌振興会・文芸思潮の五十嵐勉賞を受賞するなど、会員の中から受賞者を輩出しており、当地域の文芸分野への貢献も大きく、今後も更なる活躍が期待される。

あなたの芸術文化ライフを総合的にサポートします！  
公益財団法人名古屋市文化振興事業団

## 『友の会』会員大募集！

## エンジョイコース（年会費 3,000 円）

- ・事業団主催公演チケットの割引販売！
- ・事業団主催公演指定席チケットの先行販売！
- ・「友の会だより」「なごや文化情報」を毎月お届け！など

## クリエイティブコース（年会費 15,000 円）

- ・会員主催の公演チラシを事業団管理運営施設へ配送！
- ・会員主催の公演チラシを友の会会員へ配布！
- ・会員主催の公演で事業団の後援名義が使用できる！など

名古屋市文化振興事業団 事業案内  
TEL 052-249-9387

## —— お詫びと訂正 ——

本誌2013年2月号（No.347号）の5頁「1年をふりかえって」〈能楽〉コーナーにおいて、文章中に誤りがありました。お詫び申し上げますとともに、下記のとおり訂正させていただきます。

5頁右段下から14行目

〈誤〉野村又二郎 → 〈正〉野村又三郎

## 「なごや文化情報」編集委員

飯塚恵理人（椋山女学園大学文化情報学部教授）  
小沢優子（名古屋音楽大学講師）  
倉知外子（オクダモダンダンスクラスター副代表）  
酒井晶代（愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授）  
田中由紀子（美術批評／ライター）  
はせひろいち（劇作家・演出家）

当事業団の募集する事業にお申し込みいただいた場合の個人情報は、当該事業に関する事務連絡及び、当事業団の文化事業に関する案内のみに使用させていただきます。

# 文化小劇場 芸術三昧!シリーズ

「文化小劇場芸術三昧シリーズ」は、名古屋市内各区にある文化小劇場を会場とし、質の高い公演を地域の方々に身近に気軽に鑑賞していただけます。生の芸術の感動・素晴らしさに触れていただき、地域文化の振興に寄与したいと考え実施いたします。6月、7月は多彩なラインナップで4公演を実施します。

**問い合わせ** 名古屋市文化振興事業団チケットガイド TEL 052-249-9387

**発売日** 3月27日(水) 事業団友の会会員先行発売 3月19日(火)

## SUGITETSU SUPER EXPRESS ～「スギテツとゆかいな"鉄"仲間達」コンサート～



**日時** 6月21日(金)18:30  
**会場** 東文化小劇場

**料金** 3,000円<全指定席>  
※未就学児の入場はご遠慮ください。  
※事業団友の会会員1割引(前売のみ)

クラシック界で活躍するヴァイオリニスト岡田鉄平と、CM・演劇を中心にエンタメ系音楽を数多くこなすアレンジャー・ピアニストの杉浦哲郎のデュオ「スギテツ(SUGITETSU)」。誰もが知っているクラシックの名曲に、童謡やCMソングから街で聴こえる環境音まで何でもマッシュアップ(=融合)させる、聴くだけでなく観て楽しいコンサートを開催。今回は「鉄道」をテーマとし、鉄道仲間を交えてちょっと高めの「鉄分」でお届けします。

## 三浦一馬バンドネオンコンサート



写真提供：ビクターエンタテインメント(株)

**日時** 7月12日(金)18:30  
**会場** 北文化小劇場

**料金** 3,500円 <全指定席>  
※未就学児の入場はご遠慮ください。  
※事業団友の会会員1割引(前売のみ)

バンドネオン界の貴公子、三浦一馬。10歳でバンドネオンと出会い、第33回国際ピアノ・コンクールで日本人初、史上最年少で準優勝。「驚くべき才能、演奏技術、感受性、情熱。彼には音楽家として輝かしい未来が約束されている」と巨匠ネストル・マルコーニに言わしめた、きらめきの若きバンドネオン奏者の演奏をお楽しみください。

## 田村響ピアノリサイタル



**日時** 7月19日(金)18:45  
**会場** 守山文化小劇場

**料金** 3,000円 <全指定席>  
※未就学児の入場はご遠慮ください。  
※事業団友の会会員1割引(前売のみ)

田村響は1986年愛知県安城市生まれ。愛知県立明和高校音楽科を卒業後、18歳でザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学に留学。2007年10月にパリで開催されたロン・ティボー国際コンクールにおいて弱冠20歳で第1位に輝き、一躍世界から注目を集めました。以来、世界を舞台に演奏活動を展開しています。一層輝きを増す地元公演は必聴です。

## 山本光洋マイム公演



**日時** 7月25日(木)18:30  
**会場** 天白文化小劇場

**料金** シングル 2,800円  
ペア 5,200円<全指定席>  
※未就学児も鑑賞していただけます。  
3歳以上有料。  
※事業団友の会会員、NPO法人名古屋  
おやこセンター会員1割引(前売のみ)

ニューヨークのモニヤキムパントマイムシアター、ポリッシュマイムスクールで3年間マイムの基礎を学ぶ。帰国後、舞踏家・田中浪主宰の「舞塾」で舞踏を学ぶ。1989年より、渋谷ジャンジャンや銀座小劇場など、小劇場を中心に、KOYO MIME LIVEを展開。シャープな動きと独自の視点から生み出されるユーモアとペースを兼ね備えたマイム作品です。